

## 天候不順に伴う営農技術対策

平成21年7月21日  
北海道農政部

- ・ 7月前半(1~15日)の気象は、全体的に低気圧などの影響でぐずつく日が多く、降水量は平年よりかなり多く、日照時間は平年より少なかった。
- ・ また、札幌管区气象台が7月19日に発表した気象情報によると、気圧の谷や前線の影響により、オホーツク海側や内陸を中心に、日平均気温が平年より4度から6度低い状態が、今後1週間程度続く見込みである。
- ・ 地域では、関係機関との連携のもと、生育状況や栽培環境等を的確に把握するとともに、現地研修会や広報活動の強化等により、次の事項に留意し重点的に指導すること。

### 1 水稲(稲の生育ステージに応じた水管理の徹底を！)

#### (1) 冷害危険期の水管理

- ・ 水深測定板を活用し、水深を正しくチェックし、冷害危険期の深水管理を徹底する。
- ・ 急激な入水は水温を低下させたり、地域内で用水量の不足などが生じるため、計画的に水の取り入れを行う。深水期間では掛け流しせず、必ず止め水管理を行う。
- ・ 水田への入水は、用水と水田水温の差のない時間帯である夜間から早朝にかけて実施する。
- ・ 冷害危険期の水管理は、前歴期間の水深10cmから幼穂の伸長に合わせ、水深を毎日徐々に上げていき、冷害危険期終了(全茎の8割の葉耳間長が「+5cm」)まで最大18~20cmの深水管理を行う。

#### (2) 冷害危険期終了後の水管理

- ・ 土壌還元(ワキ)の激しかった水田では、冷害危険期終了から出穂前の約7日間を利用して中干しを実施する。土壌表面に細かなき裂が入るまで干す。同時に田面に溝切りを行い、その後の水管理が容易になるように努める。

#### (3) 出穂後の水管理

- ・ 出穂が始まると、開花受精や子房(玄米)肥大のために十分な土壌水分が必要となるので、直ちに中干しを終えて湛水状態に戻す。

#### (4) 稲の葯の充実状況の把握

- ・ 稲の出穂が始まったら、穎花(稲の花)の観察を行い、葯の形態(大きさ等)や花粉の量、充実度を把握する。

#### (5) 出穂開花後の水管理

- ・ 間断かんがいを実施し土壌水分を維持する。
- ・ 落水時期は登熟状況にあわせて実施し、水田の乾きのよいところでは出穂期後25日以降とする。

## 2 畑作物

### (1) 小麦

- ・ 長雨の影響から今後アミロ粘度の低下、粉色の劣化、穂発芽の発生など、品質低下が懸念される。ほ場毎の収穫適期を的確に把握し、気象予測に基づいた適切な計画のもとに効率よく収穫作業を進める。
- ・ 倒伏及び赤かび病や雑草の発生により品質の低下した部分の刈り取りは、他の健全なほ場の収穫後に行うよう収穫計画を組み直し、健全部分の品質低下を防ぐ。
- ・ 生育ムラのあるほ場は、登熟が進んでいる部分から収穫するなど、効率的な収穫作業に留意する。
- ・ 穂発芽した小麦は、アミロが低下しているなど品質が劣るため、正常な小麦と混ぜないよう別刈りを行う。
- ・ 乾燥についても、健全部分と被害部分（倒伏、赤かび病、雑草の発生、穂発芽等）は別に取り扱い、乾燥を行う。
- ・ 通常は子実水分30%以下で収穫するが、高水分（31～35%）で収穫する場合は、試し刈りによりコンバインの調整を十分行う。収穫にあたっては、収穫速度を適正にするとともに、高刈りをしないなど損傷粒や未脱の発生を抑える。
- ・ 高水分で収穫した小麦を乾燥する場合は、退色粒が生じないよう高温乾燥を避ける。熱風温度は45℃以下とし、穀温は25～30℃で乾燥を開始する。乾燥効率を上げるため二段乾燥を行う場合は、子実水分18%以下で通風装置のある貯留ビンで一時貯留を行うことを原則とする。やむを得ず通風装置のないフレコン等で一時貯留を行う場合は、DON（デオキシニバレノール）濃度が高くならないよう、なるべく速やかに仕上げ乾燥を行う。

### (2) 豆類

- ・ ほ場の多湿や停滞水は茎疫病の発生や、根の障害に繋がる。停滞水は速やかに排水する。

### (3) ばれいしょ

- ・ 軟弱に生育しており、今後病害の発生が懸念される。疫病、軟腐病の発生に留意し必要に応じて防除を実施する。
- ・ ほ場の多湿や停滞水は、塊茎腐敗の発生に繋がる。停滞水は速やかに排水する。

### (4) てんさい

- ・ 褐斑病、葉腐病、根腐病、斑点細菌病などの発生に留意し、必要に応じて防除を実施する。
- ・ ほ場の多湿や停滞水は、根腐病、黒根病の発生に繋がる。停滞水は速やかに排水する。

### 3 野菜類

- (1) これまでのところ降雨の日が多く、日照が不足している。特に果菜類では、今後の昼夜の気候の変化にあわせた早めの保温等きめこまかな適切な管理が重要となる。
- (2) 収穫は適期に行うとともに、メロン実くずれ果やだいこん赤しん症などの生理障害が発生しやすい時期なので、選別に十分注意して出荷品への混入を避ける。
- (3) 病害虫の発生が続く時期なので適期防除に努めるとともに、農薬、除草剤の使用に当たっては「農作物病害虫・雑草防除ガイド」を遵守する。

### 4 果樹

- (1) 見直し摘果を励行し、商品性の低い果実を優先的に摘果して着果量の適正化を図る。
- (2) 徒長枝の切除、枝の誘引、支柱入れなどを励行し樹体への日当たりを良好にする。
- (3) 予察調査などで病害虫の発生動向を的確に把握し、適期防除を行う。

### 5 花き

- (1) 今年は、これまでのところ降水量が多く、日照不足の日が多いので施設栽培では気温や日照の変動に留意し、生育に応じ温度やかん水等の管理を適切に行う。
- (2) 病害虫の発生が多くなるので、早期確認による適正防除に努める。

### 6 牧草

- (1) 一番草の収穫作業
  - ・ 一番草の収穫が遅れている地域もあるので、細断サイレージの調製で適正な添加剤の使用に努める。
  - ・ 収穫したサイレージは調製した月日等をロールや壁に書き込み、給与するときの参考にする。
  - ・ ロールベール乾草の収納はくん炭化や自然発火の恐れがあるので、ベール中心温度が30 以下になったことを確認してから屋内に収納する。
  - ・ 1 番草刈取り後の追肥時期はチモシー主体草地が刈取り 5 ~ 10 日後、オーチャードグラス主体草地が刈取り直後で適期施肥により 2 番草の収量を確保する。
- (2) 自給飼料の品質調査
  - ・ 乾草やロールパックは個数、サイレージは容積から推測、越冬粗飼料の把握に努める。
  - ・ 品質の低下も考えられるので、調製貯蔵した粗飼料の分析を実施して飼料設計に活用する。

お問い合わせ先：食の安全推進局技術普及課（電話011-231-4111 内線27-816）